柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 121 号

シリーズ川崎の歴史を知ろう！
「川崎の文化財」-20

麻生区内における旧都筑郡地域の古代の様子を想像してみましょう（6）　～旧都筑郡地域の遺跡⑤～

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員　栗田　一生

今回は、「麻生区内における旧都筑郡地域の古代の様子を想像してみましょう」の第6回目です。前回は旧都筑郡地域の遺跡から出土している「山口」という墨書土器から、山口という地名が古代まで遡る地名である可能性が高いことをお話ししましたが、ここではその「山口」という地名がどういう意味を表しているのかについて、考えてみたいと思います。

これまでにお話ししてきましたように、現在の小田急線新百合ヶ丘駅～柿生駅にかけての丘陵上の遺跡からは「山口」と記された墨書土器が多く出土していますが、旧都筑郡地域の1つである麻生区はるひ野（旧麻生区黒川）に所在した黒川地区遺跡群 No.10 遺跡においても、「口」と書かれた墨書土器が出土しています（図 1-右）。この墨書土器は、土器に記された位置から上に文字が続くのは難しいため、「～口」と書かれたものが割れて「口」となったものではなく、おそらく最初から「口」一文字の墨書であると推定されます。周辺の遺跡も含め、「口」もしくは「～口」と書かれた墨書土器が出土していないことから、小田急線沿線で出土している「山口」との関連性は不明ですが、旧都筑郡地域の別々の場所で、同じ「口」と記された墨書土器が出土していることが注目されます。

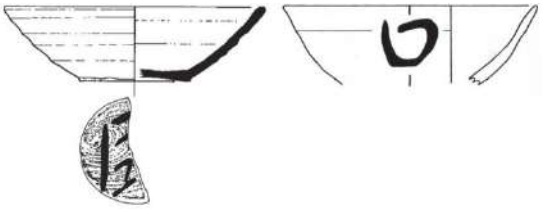


図1　墨書土器（右：黒川地区遺跡群No.10 遺跡、左：古沢都古東遺跡第１地点）

そこで、「口」と記された墨書土器が出土する遺跡が立地する場所を改めて確認すると、黒川地区は多磨郡、小田急線沿線地区は多磨郡や橘樹郡と近接する境界の地域であったことが分かります。古来より日本では、何かと何かを区切る＝堺（境）や人・モノが出入りする場所を明確化するために、そこを「口」あるいは「～口」と呼ぶ例がよく見られます。この歴史的事象を参考にすれば、旧都筑郡地域の2つの地区で「口」と書かれた墨書土器が出土するというのは、それぞれの地区が、多磨郡と都筑郡、多磨郡・橘樹郡と都筑郡に近接する郡境であると認識されていたためではないかと考えられないでしょうか。

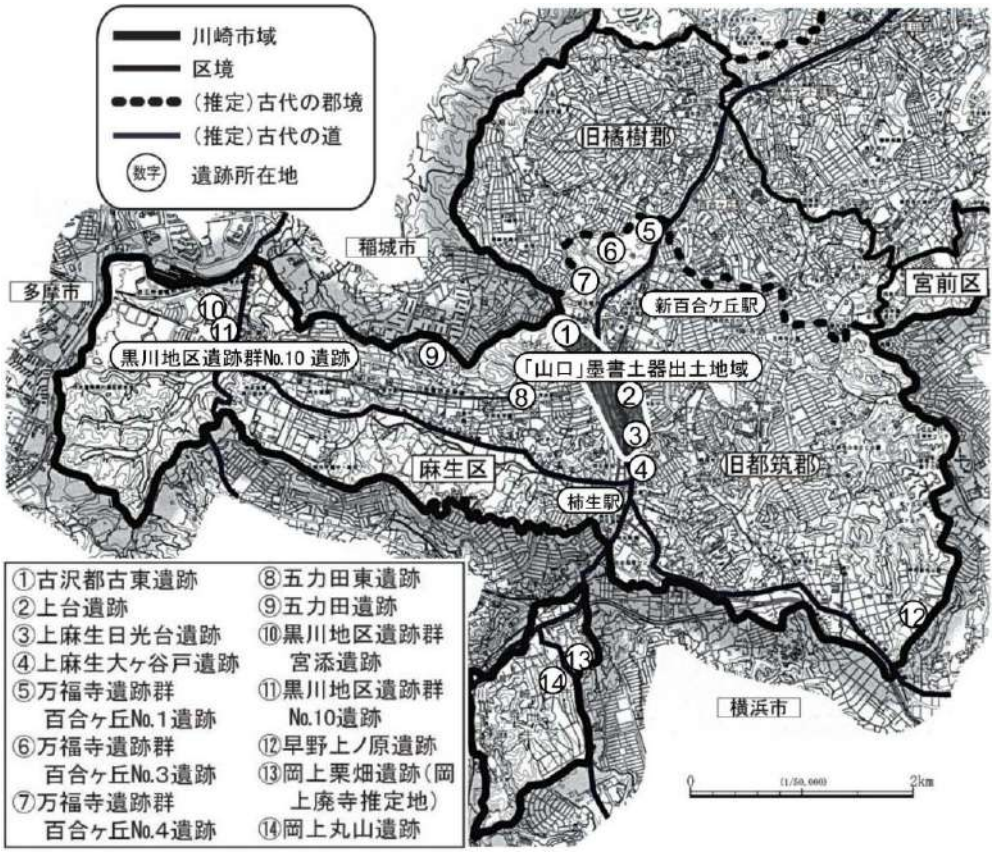


図2　墨書土器「山口」分布範囲と黒川地区遺跡群No.10 遺跡

それを裏付ける可能性があるものとして、古沢都古東遺跡第 1 地点から出土した墨書土器があります（図 1-左）。この墨書土器は、川崎市教育委員会が実施した追加調査の 9A 号住居跡から出土した須恵器杯で、約 1/2 が失われているため文字を確実に判読できませんが、確認できる部分から推測すると、「厨」と書かれている可能性が高いと思われます。厨家は役所や寺院等の公的な施設の厨房施設ですが、公的な行事や饗宴の場によって移動することもあるため、この墨書が「厨」であれば、この場所で厨家が置かれるような行事が行われたことが想像できます。では厨家が置かれる行事とは何であったかを考えてみると、都から派遣された国司が国内の視察で郡から郡へと移動する際、郡境付近で饗が開かれたという記録があることから、厨家が置かれた「山口」と呼ばれた小田急線沿線地区は、まさに郡境の地として、饗宴が開催される地域であったと推測することも可能だと思われます。

（つづく）

シリーズ
「麻生の歴史を探る」　第91話

津久井街道 ～登戸宿、竹の花宿～

小島　一也（遺稿）

ご存知の柿生音頭（志村昇作）の一節に、「♪津久井街道　相模と江戸を　結ぶ縁（えにし）の絹の道～♪」と唄う道がありました。現在の地方主要道世田谷線がそれですが、津久井の谷間の村々から始まるこの道は、相模、町田、鶴川、柿生、生田、登戸で多摩川を渡り、世田谷、三軒茶屋で大山街道と合流、渋谷、赤坂御門に至るもので、麻生を通るこの道は、前稿「麻生の古道」（柿生文化第70～76号）で述べたとおり、鎌倉時代の義経道から、室町時代の義貞道、そして江戸時代、名産禅寺丸柿、黒川炭などを運ぶ江戸道となり、時代とともに道筋も変え、その歴史を語ってくれています。

この江戸道が絹の道と名付けられるのは、江戸時代中期、天明年間（1781～88）、津久井、愛甲、相模に起こった絹織物が、八王子の問屋を通さず、直接江戸に販路を求めたことによるものです。この地方には、ウルシ（塗りもの）、煙草、蕨（わらび）、石材、川魚などがあり、江戸百万町民の嗜好はこれを好み、人馬、行商人の往来がこの道を賑わせていました。

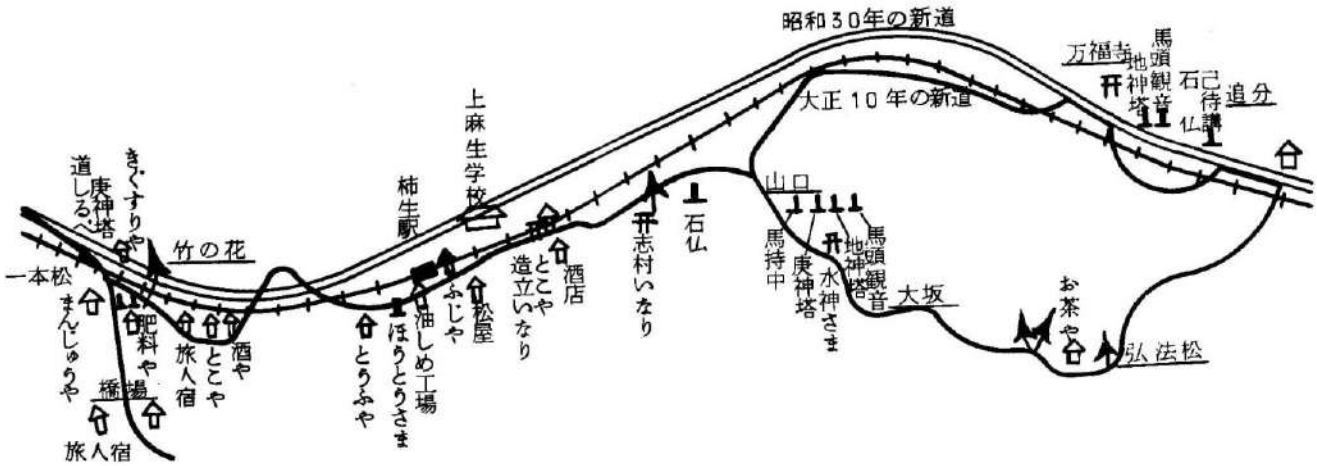
この津久井道で一番賑わいを見せたのは”登戸宿”で、ここは多摩川の渡船場、奥多摩で切られた木材を筏に組む集積場、海路運ばれる石材を荷受けする石河岸、そしてこの登戸の宿は農民渡世の左官職人の土地として知られ、天保九年（1838）、登戸の宿には宿屋が4軒、居酒屋が13軒、煮物屋が8軒。それは川崎、四宿、東海道川崎宿を除き、中原街道小杉宿、大山街道溝の口宿を上回る賑わいだったそうです（津久井街道、稲田図書館）。渡船場は現登戸駅と多摩水道橋の中間、石河岸運河、木材の集積所はその上流にあったそうですが、渡船は馬船と呼ばれる船頭3人漕ぎの全長8～9m、幅3m、床を二重張りの船が人馬や荷車を乗せ、木材は筏に組まれて六郷河岸に流され、石河岸は現吉沢石材店に通じていたようです。

この津久井街道は、麻生区柿生にも「竹の花宿」と呼ぶ宿場を残しています。そこは上麻生字仲村、現麻生水処理センターに接するところで、昭和初年柿生の養蚕関係を記録した年表には、「文化十年（1813）江戸呉服商55 人による八王子仲買人を通さない江戸直売が始まり、柿生を通る津久井街道が絹の道として賑わった」と記されています。柿生、岡上郷土誌は、「文化年間（1804～1814）津久井街道を江戸へ絹織物を運ぶ人が増え、この人たちを相手にする宿屋、床屋、酒屋などができ、竹の花宿となった」と述べています。竹の花とは地名ですが、丘を背にした温暖なところで、柿生は江戸と津久井の中間にあたり、絶好の休憩地だったのでしょう。現在この道は湾曲した道筋が僅かに昔日をしのばせていますが、何よりも今に残る、わたや（宿屋）、とこば（床屋）、みせ（作り酒屋）などの在家の屋号がその先祖の商を今に伝えています。

この竹の花宿に続く大ヶ谷戸（現柿生駅前）には、寛政十一年（1799）造立の高さ 2m余の宝塔が津久井街道跡をしのばせ、文化、文政の頃の創業とされる豪商藤屋跡、生糸問屋の松屋、豆腐・煮〆屋跡などがあり、そして現坂の稲荷坂（江戸に向かい右手に急坂があった）の坂上には床屋が、中腹には酒屋があり、造立稲荷の木立が通行人を憩わせていたそうです。

大ヶ谷戸から江戸への津久井街道は、上麻生山口（松葉下）で旧道と新道に分かれており、旧道は、通称大坂から弘法松に向かい、新道は大正十年（1921）陸軍大演習の際、麻生川沿いの山麓に万福寺向けに建設された道で、大正年代から旧街道の人の往来は絶え、この新道が津久井街道となりますが、この道も昭和三十二年その役目を終え、片平側の物流の動脈、世田谷町田線に代わっていきます。

登戸宿、竹の花宿をにぎわした津久井街道は、安政年間に入り人馬の往来が減っていきます。それというのは安政五年（1858）日本とアメリカの通商条約は、江戸から横浜へ絹の流れを変えたからで、この麻生でも人の流れを津久井街道から日野往還（横浜上麻生線）に移り、竹の花宿は橋場の宿になっていきます。



参考資料:「川崎市史」「ふるさとは語る（柿生郷土史刊行会）」「津久井街道（稲田図書館）」「歩け歩こう麻生の里」

シリーズ
教育の歩み 第１部

学校の誕生と成長（９）

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆宗教改革と書物◆

宗教改革と聞くと、ルターやカルヴァンといった改革指導者の名前が浮かぶと思います。彼らが改革の指導者であったことは間違いないのですが、重要なのは、宗教改革の本質が、キリスト教の聖典である聖書解釈を巡る教義上の対立にあったということです。この教義上の対立は古くから存在しました。しかし、ローマ教会（ローマ・カトリック）とコンスタンチノープル教会（ギリシア正教）の分裂を除くと、宗教改革以前の教義を巡る対立は、常に多数派が自らの教義を正統とし、少数派を異端として排斥し、葬り去る形で決着してきたのです。宗教改革前史として知られるオックスフォードのウィックリフやボヘミヤのフスも、まさにこの例です。

マルティン・ルター

ところが、ルターやカルヴァンは、ローマ教会から異端とされながらも踏みとどまり、改革者として称揚されることになったのです。いったい何故なのでしょう。この秘密を解く鍵が、印刷術と教育の普及、即ち識字能力の発達にあったのです。

グーテンベルクの活版印刷術は、1450 年代後半に実用化されました。ルターの改革のおよそ 60 年前のことです。有名なルターの『95カ条の論題』が取り上げ、話題が沸騰した贖宥状（免罪符）もまた、この活版印刷を利用して、大量に印刷されたものでした。これまで、手描きで1枚1枚書いていたものが、鉛の活字を作って活版に組みあげれば、一度に大量の印刷が可能になったのです。これは文字の世界にとって、まさに革命的な出来事でした。

あとは大量の用紙が用意できれば事が足ります。しかし、この紙の確保も決して平坦な道ではなく、相当な苦心が必要だったのですが……。

ところで、これも宗教改革史でお馴染の話ですが、ルターもカルヴァンも大勢の支持者に囲まれ、守られたからこそ、彼らを不倶戴天の敵と考え、異端として処刑したいとさえ考えていたローマ教会も、処刑に二の足を踏み、遂に処刑に踏み切ることが出来なかったのです。ルターについて、時の神聖ローマ帝国皇帝カール5世は、ローマ教皇レオ10世から、ルターの処罰を依頼されます。ルターがローマ教皇の破門状を、公衆の面前で燃やしてしまったからです。しかしカール5世は、ルターを処刑することは出来ませんでした。彼が実施できたことは、ルターを国法の保護の及ばない人間に指定する事だけだったのです。「自由に殺して良い。ルターを殺しても罪は問わない」と宣言しただけだったのです。それでも危機といえば危機ですが、捕えられて火刑に処されるよりは、生存確率はグンと上がります。

ルター以前にローマ教会の教えと異なる教義を唱え、異端として処刑されたり、社会的に葬られた改革者たちとルターとの違いは、広範な信者たちの支持が寄せられたか否かの違いにありました。その違いは、印刷術と識字率の普及によって、ルターの教えが広く一般の人々の間に浸透したことにあったのです。

これも良く知られた事実ですが、1517 年 10 月 31 日にルターが発表した「95カ条の論題」は、全文ラテン語で書かれていました。彼は教皇庁の学者たちと宗論を行う形式に拘っていたのです。ところが、誰かは分かっていないのですが、彼の『論題』は、ただちにドイツ語に訳され、勝手に印刷されて売りに出されたのです。当時は著作権という考え方はまだなく、版権という考え方もなかったため、あちこちの都市の印刷業者が勝手に印刷して勝手に販売する事が可能だったのです。その結果、ローマ教会はルターの『論題』を無視する事も、うやむやのうちに闇に葬り去ることもできなくなったのです。この点でルターはまさに、印刷術の申し子だったのです。

ドイツの印刷工房

◆グーテンベルクと印刷革命◆

グーテンベルクの活字印刷とは、鉛鋳造の可動活字、油性インク、木製の平圧式印刷機からなる印刷術でした。この印刷機が普及する以前は、1冊1冊筆耕による書写でしたから、ごく限られた古典的著作や暦法関係の書物が、知識の保存・伝達のために細々と作成されるだけだったのです。大学の誕生後、学生たちの必要から書物の生産も増え、大勢の筆耕職人を抱える書籍商も現れたのですが、書写による書物は大変に高価な品であり、1冊の書物が大学教授の年棒の1割以上（つまり月給よりも高い）、大部の書物では年棒の2割を超えることも珍しくなかったのです。書物は豊かな支配層のものだったのです。聖書などの書物が活版で印刷され、一度に 100 部～200 部も印刷されたのは、まさに革命的な出来事でした。『グーテンベルクの聖書』の印刷から 40 数年を経た 15 世紀末、ドイツでは 52 都市に印刷工房があり、欧州全体では 245 都市に 1 千軒近い印刷工房が存在したと言われます。　（続く）

第8回史跡見学バスの旅レポート
下野国の名所巡り

4 月 18 日（水）午前8時5分、昨夜からの雨の残る新百合丘を出発した 44 名の一行は、一路足利を目指しました。

午前の見学先、栗田美術館では、古伊万里や鍋島の名器が惜しげもなく並べられていて、圧倒されました。館を出て、昼食会場へ。お店で打ったばかりの手打ちの野菜天ザルに舌鼓みをうって、一路足利学校へ。この頃には雨も上がり、青空が覗いてきました。

足利学校では、保存状態の良い教室棟や孔子廟、図書館などを見学。漢籍を学ぶ気分を味わって、隣接する足利家の菩提寺、鑁阿寺へ。国宝や重要文化財に指定された貴重な建物群を見学し、最後の見学地佐野市の唐沢山城址に向かいました。見事な石垣を見ながら、本丸跡の唐沢山神社と見晴らし台へ。雨上がりで靄がかかり、東京の高層住宅群や富士山こそ見えませんでしたが、広い関東平野を一望できる景観を楽しんで帰路へ。7時 15 分に帰着しました。

足利学校　ボランティアガイド

足利学校　教室

唐沢山城　見事な石垣

柿生郷土史料館催物案内　【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）

6月　2・16・23 日（毎土曜日）　**7月**　1・8・15・22 日（毎日曜日）

◎開館時間:午前10時～午後3時　（6月9日は休館です。）

第75回 カルチャーセミナー
明治維新 150 年記念行事　協賛セミナー　その1
八甲田山雪中行進事件

新田次郎の小説『八甲田山死の彷徨』で一躍有名になった八甲田山雪中行進の悲劇ですが、今回、改めてその惨事を振り返ってみたいと思います。

その事前準備から事件後の軍部の後処理まで、知られざる側面を含め語って頂きます。

講師：荒井悦郎氏　（元青森県史編纂専門委員）

日時：６月２３日（土）午後１時 30 分～３時 30 分

会場：柿生郷土史料館特別展示室

第14回 特別企画展
「くらしの窓」に見る柿生地区の今昔　その3
～　昭和から平成へ　～

昭和30年創刊のミニコミ誌「くらしの窓」が捉えてきた地域の姿を御紹介していますが、今回はその第3弾、昭和から平成への過渡期の頃の地元の姿を展示します。

期間　3月4日（日）～6月23日（土）

場所　柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。

会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページ http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo をご覧ください。